

# 美男子平均顔の時代変化と女性の配偶戦略の 関連についての一考察

— ジュノン・スーパーボーイ・コンテストBEST30通過者を題材として —

高橋 征仁  
染川みさと

## 要旨

本研究では、男性顔の時代変化とそのメカニズムを明らかにするために、日本を代表する美男子コンテストである「ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト」のBEST30通過者の顔写真を題材として検討を行った。まず、1988年から2021年までのBEST30通過者を4つの時期ごとに分けて、それぞれの時期の美男子平均顔を作成した。次に、大学生を対象者としたアンケート調査において、ランダムに並び替えた4種類の美男子平均顔について、①印象評価と②恋愛相手・結婚相手としての魅力度を測定した。そしてさらに、美男子平均顔に対する魅力度の違い（選り好み）を説明するための変数として、対象者の③結婚観・子ども観など配偶戦略について尋ねた。

このようなアンケート調査を行った結果、①最新の美男子平均顔ほど、より「穏やか」で「女性的」、「ひ弱」と評価される傾向があり、美男子平均顔の「脱男性化」が主観的印象ではなく、客観的事実であることが確認された。そして、②最も「穏やか」な最新の美男子平均顔に対して、半数以上の女子学生が恋人・結婚相手としての魅力を感じており、その割合は男子学生の予想を大きく上回っていた。さらに、③このような女子学生の選り好みは、結婚相手の経済力を重視しない姿勢や子どもへの従順性の期待、ブレイク・フォグ頻度の低さなどとも関連していた。

これらの知見にもとづけば、美男子平均顔にみられる「脱男性化」の傾向は、女性の選り好みを反映しており、女性の選り好みは、恋愛や結婚、子育てに関する配偶戦略の変化の影響を受けていると考えられる。ただし、先行研究によれば、男性顔の「脱男性化」は、先進諸国に広く見られるだけでなく、人類史全体を通じた一貫した傾向でもあると指摘されている。これらの指摘を前提とするならば、「脱男性化」した男性顔への選り好みは、時代変化を超えた頑健な傾向であり、人類の「自己家畜化」をもたらしている大きな要因の一つとも考えられる。

## 1. 問題の所在—男性顔の脱男性化傾向は何を意味するのか？

近頃の男子学生をみていると、顔つきや身体の線が非常に細くて、どんどん華奢になっているように思われる。また、自分が大学生だった頃に比べると、身体だけでなく精神的にも、「若く」「幼く」なっていると感ぜられる。昭和の時代には繁華街に漂っていた若い男性特有のキラキラさが、平成や令和の時代になると、きれいさっぱり消失してしまっていることに驚かされる。またその反面、若い男性の意欲のなさやコミュニケーション力の低さは、引きこもりや依存症などの新しい社会問題をもたらしているようにも思われる。

このような若い男性にみられる「脱男性化」の傾向は、ともすれば政治的争点となり、新しい時代変化を好むリベラル層ないし若年女性と、新しい時代変化を受け付けない保守層ないし高齢男性との間で、賛成か反対か、歓迎か拒絶かといった両極端な価値的な反応を引き起こしがちである(Zimbardo & Coulombe 2015、伊藤ほか 2022、参照)。しかし他方、このような時代変化がはたして客

観的な事実なのか否か、客観的事実だとすればなぜそうした複雑で多面的な変化が生じているのかという点についての科学的探究は、まだ不十分であるように思われる。とりわけ「脱男性化」の原因に関しては、生活環境や養育環境の変化といった文化的・社会的説明がほとんどであり、顔つきや体格といった形態学的変化まで含めた説明としては明らかに不十分である。

男性顔の形態学的変化を明確に主題化した実証的研究としては、原島・馬場（1996）を挙げることができるだろう。馬場は、男性の縄文人と渡来系弥生人、現代人の頭蓋骨の測定データをもとに、100年後の男性未来人のシミュレーションを行っている（原島・馬場 1996:112-118）。他方、原島は、大阪の高校の1943年と1994年の卒業アルバムを用いて、それぞれの時期の高校生の平均顔を作成し、その時代変化にもとづいて100年後の高校生の男性顔のシミュレーションを行っている（原島・馬場 1996:196-200）。そして、このように全く異なった2つのアプローチによって男性顔の時代変化の最大の特徴が顎の小型化にあると特定し、その要因を食生活の変化（柔らかくなった食べ物）に求めている。

たしかに、原島の作成した男子高校生の平均顔を見比べてみると、50年間の間に、がっしりとした顎がシュッと細くなり、形態学的変化は明白である。しかしながら、「脱男性化」の傾向を食生活の変化に伴う顎の未発達として説明している点で、いくつかの疑問が残る。

まず第1に、男性の変化は、顎の小型化だけでなく、眉弓（眼窩上隆起）や頬骨の低さ、小顔、色白、体毛の薄さ、骨格の華奢さ、声の高さなど多方面に及んでいる（松本 2019）。また、テストステロン・レベルの低下（Lokeshwar et al 2021）や精通年齢の遅延（高橋 2013）、精子量減少（Levine et al 2017）などの生理学上の変化や、暴力犯罪の減少（Pinker 2011）などの行動上の変化も世界各国で指摘されている。食生活の変化だけで、このような広範な変化を説明できるとは考えにくいし、逆に、硬い食品をしっかりと噛む食習慣を身につければ、こうした形態学的・生理学的変化が元通りになるとも考えにくい。

第2に、食生活の変化による顎の未発達という説明では、なぜ男性顔だけが大きく変化し、女性顔はあまり変化していないのか不明である。そもそも男性の顎が小型化しても機能的な利益はないため、適応論的な説明を行うことは原理的に困難であると考えられる。性的2型の縮小傾向についても同様に、適応論的な説明ではうまくいかないだろう。

第3に、顎の小型化などの「脱男性化」の傾向について、なぜ女性の選り好みが続いているのかという点も、食生活の変化だけで説明することは困難だろう。原島・馬場（1996）では、平安貴族や徳川將軍家における男性顎の小型化が指摘されているものの、食生活の変化だけが強調され、脱男性化した顔に対する女性たちの選り好みは軽視されている。しかし、女性たちの選り好みにもとづく性淘汰を抜きにして、男性顔の世代的変化が急速に拡大するとは考えにくい。

このような適応論的アプローチや文化的・社会的アプローチに取って代わって、脱男性化傾向を説明できる有力候補として、Wrangham（2019）や Hare & Woods（2020）などが近年展開している人類の自己家畜化（Self-Domestication）論を挙げることができるだろう。彼らによれば、人類の特徴である平板化した顔や性的2型の縮小、頭蓋骨の縮小、色素脱失、繁殖サイクルの短期化、友好性、好奇心といった一連の特性は、イヌやネコなどの家畜動物と共通する「幼形形態形成」（paedomorphosis）であり、より従順性の高い個体同士の交配によって生じるとされる。すなわち、他の個体に対して警戒し威嚇する反応的攻撃性が低い個体を配偶相手として選択していくだけで、神経細胞・副腎髄質・顔面の骨や軟骨・メラニン細胞などに分化していく神経堤細胞（neural crest cell）の遊走パターンが変化し、一連の家畜化症候群がもたらされることになるという（Wrangham 2019=2022: 103-111, Hare

& Woods 2020=2022:133-136)。

このような自己家畜化論の考え方にもとづけば、平和で豊かな世の中になり、女性が反応的攻撃性の高い男性を回避し、より従順な男性を選び好みするようになれば、その結果として、男性顔の平板化や性的2型の縮小傾向といった新しい形態学的・生理学的・心理学的変化が生じると考えられる<sup>1)</sup>。すなわち、社会環境の変化によって女性の配偶戦略や選り好みが変化したことで、自己家畜化が進行し、「脱男性化」が生じていると予想される。

そこで本研究では、女性の選り好みが強くと反映される美男子コンテストの候補者を題材として、それぞれの時期の美男子平均顔を作成することにした。そのうえで、高校生の平均顔の時代変化と同様、①美男子平均顔においても「脱男性化」の時代変化が見られ、その核心が従順性（穏やかさ）にあることを明らかにする。次に、②最も「穏やか」な最新の美男子平均顔が、女性にとって恋愛相手や結婚相手として魅力度が最も高く、従順性に対する女性の選り好みが存在することを明らかにする。そして最後に、③従順性に対する女性の選り好みの要因として、結婚観や子育て観に関する配偶戦略の影響を検討していく。

## 2. 研究方法

### 2-1. ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト BEST30による美男子平均顔の作成

ジュノン・スーパーボーイ・コンテストは、雑誌『JUNON』（主婦と生活社）が1988年から開催している日本最大規模の美男子コンテストである。芸能事務所等に所属していない12歳～22歳の男性に参加資格があり、近年では17,000名前後の応募者がいる。このコンテストをきっかけにデビューした芸能人には、武田真治（1989年）や原田龍二（1990年）、袴田吉彦（1991年）、伊藤英明（1993年）、小池徹平（2001年）、溝端淳平（2006年）、三浦翔平（2007年）、菅田将暉（2008年）など、錚々たるメンバーが名を連ねている。

このコンテストでは、大会ごとに選考プロセスが若干異なるものの、まず、第1次審査として書類審査やイベント選考を行い、約1000名の候補者 BEST1000に絞り込まれる（JUNON 2021）。次に、地方予選とイベント選考の第2次審査によって BEST150が選ばれる。さらに、第3次審査では、一般ユーザーによる人気投票を繰り返し行い、BEST150→BEST70→BEST30-37→BEST20→BEST10のように絞り込まれていく。そして、この10名と敗者復活戦で勝ち残った5名の合計15名がファイナリストとして最終選考会に挑んでいくという。

このように多段階で厳選された候補者の平均顔を合成すれば、女性がどのように「イケメン」を認知・評価しているのか、また選り好みを繰り返した結果、美男子平均顔にどのような時間的変化が生じるのかを解明できる貴重な資料になると考えた。

ジュノン・スーパーボーイ BEST30の平均顔を作成するにあたって、まず国立国会図書館から、BEST30掲載予定の『ジュノン』10月号の特集ページを32回分取り寄せた（染川2022）。最新の2号分に関しては、該当の雑誌を直接購入した。ただし、2012年と2013年の2年分に関しては、BEST30の発表時期がずれていたため、国立国会図書館から「該当ページなし」という連絡を受けた。そのため、2012年の候補者については合成に含まれておらず、2013年分については別途入手できた BEST10の候補者の一部について写真を用いている。

表1. ジュノン・スーパーボーイ BEST30平均顔の作成に用いた候補者の内訳

合成顔	大会	年度	応募総数	対象者	18歳未満	除外（非正対、髪型、眼鏡）	合成数
A顔166人	第1回	1988	2,830	BEST30	不明	11	19
	第2回	1989	2,460	BEST30	9	5	16
	第3回	1990	2,200	BEST30	4	7	19
	第4回	1991	3,478	BEST40	10	8	22
	第5回	1992	3,363	BEST40	8	11	21
	第6回	1993	3,592	BEST40	7	9	24
	第7回	1994	5,457	BEST40	17	7	16
	第8回	1995	6,084	BEST50	17	4	29
B顔82人	第9回	1996	6,375	BEST30	15	0	15
	第10回	1997	10,563	BEST30	13	4	13
	第11回	1998	13,446	BEST30	7	6	17
	第12回	1999	14,112	BEST30	15	0	15
	第13回	2000	14,537	BEST30	17	4	9
	第14回	2001	15,007	BEST30	13	5	12
	第15回	2002	15,223	BEST30	20	0	10
	第16回	2003	15,305	BEST30	24	1	5
	第17回	2004	14,385	BEST30	19	2	9
	第18回	2005	14,303	BEST30	23	2	5
C顔63人	第19回	2006	13,940	BEST30	25	0	5
	第20回	2007	15,084	BEST30	16	0	14
	第21回	2008	15,338	BEST30	23	0	7
	第22回	2009	15,491	BEST30	22	1	7
	第23回	2010	15,132	BEST30	25	1	4
	第24回	2011	13,226	BEST30	20	0	10
	第25回	2012	13,816	-	-	-	-
	第26回	2013	13,117	BEST10	5	1	4
	第27回	2014	13,520	BEST30	22	4	4
	第28回	2015	13,948	BEST30	13	4	13
D顔87人	第29回	2016	14,210	BEST30	13	3	14
	第30回	2017	17,293	BEST30	20	0	10
	第31回	2018	16,293	BEST30	14	1	15
	第32回	2019	17,165	BEST36	14	0	18
	第33回	2020	17,158	BEST35	16	2	17
	第34回	2021	16,622	BEST37	22	2	13

表1に示したのは、それぞれの大会ごとに平均顔作成に用いた候補者数を示したものである。大会によって選抜プロセスが若干異なるため、BEST30を対象者に行っていることもあるが、BEST37やBEST40という時もある。

さらに、この候補者の選定にあたっては、大きな問題が2つあった。一つは、平均顔合成に用いる候補者の年齢である。ジュノン・スーパーボーイ・コンテストの候補者の候補者は、12～22歳と年齢層が幅広いので、すべてを合成するとどうしても中学生や高校生の顔になってしまう。しかも、2000年代に入ってからは、18歳未満のBEST30候補者の数が増え続けていた。そのまますべての対象者を平均顔に合成してしまうと、こうしたコンテストの低年齢化の影響が反映されてしまうことになる。そこで今回の研究では、18歳以上の候補者の顔写真に限定して平均顔の合成に用いることにした。ただし、1988年の最初の大会の候補者は年齢が不明であったため、すべて合成に用いている。このようにして候補者の年齢を限定することで、大学生向けのアンケート調査における恋愛相手や結婚相手選びとも、うまくマッチすると考えた。

もう一つの問題は、候補者の顔写真の向きや髪型、眼鏡といった問題である。とくに大会初期の頃

の写真は、斜めを向いていたり、派手な髪形をしていたりする候補者が多かった。そのため、そうしたケースでは、平均顔の合成手続きから除外した。こうした2つの要因のために、全体として合成に用いた候補者の数は限定されている。

このようにして選んだ候補者の顔写真について、iPhone/iPad用のスマートフォンアプリ「平均顔合成ツール Average Face PRO」を用いて合成した。図1に示したように、このアプリでは、ワイヤーフレームを用いて顔の構造を捉え、輪郭や眉、目、鼻、口などのマーカを自動で認識し、それぞれの距離を測定していくモーフィングアルゴリズムを用いて平均顔を作成していく（瀬山2022）。したがって、眉や目、鼻、口といった顔の主要なパーツを真正面から撮影した顔写真に関していえば、次々と写真を取り込んで自動で平均顔を作成することができる。手動でマーカを位置をずらすこともできるが、今回は、マーカが明らかに誤認識している場合にのみ使用している。



図1. ワイヤーフレームによる顔構造の認識

図2の4枚の写真は、このような作成手続きにもとづいて、一定の時期区分ごとに美男子平均顔を作成した結果を示している<sup>2)</sup>。A顔は1988～1995年の候補者166名、B顔は1996～2005年の候補者82名、C顔は2006～2016年の候補者63名、D顔は2016～2021年の候補者87名をもとにしている。それぞれの美男子平均顔に見いだされる印象は、数枚の写真を入れ替えてもほとんど変化はなく、かなり頑健なものといえる。

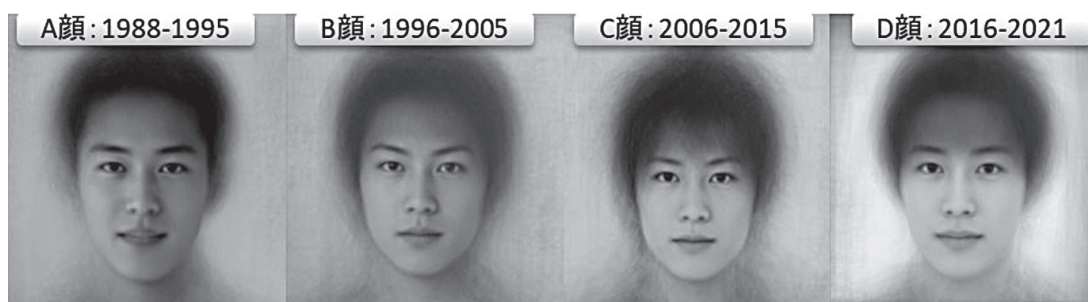


図2. 4つの時期のジュノン・スーパーボーイ BEST30の平均顔

## 2-2. 美男子平均顔に関するアンケート調査の概要

さらに本研究では、これら4種類の美男子平均顔の時期がわからないようにランダムに並び替えて、それぞれの印象評価や魅力度を尋ねるアンケート調査を実施した。この調査では、地方のY大学学生を対象者として、次の3点を主な調査課題として設定した。

- ①4種類の美男子平均顔に対する印象評価はどのようなものであり、「脱男性化」のような時系列的な変化が見られるのか。
- ②4種類の美男子平均顔は、女子学生にとって、恋愛相手や結婚相手としてどの程度魅力度なの

か。また男子学生は、女性にとっての魅力度をどう予想するのか。

③調査対象者の結婚や子育てに関する配偶戦略は、魅力度やその予想にどのような影響を与えているのか。

①については、4つの美男子平均顔を B 顔→D 顔→A 顔→C 顔の順に並び替えたうえで、バイポーラ尺度を用いて印象評価を測定した。測定に用いた形容詞対（左 - 右）は、「男性的—女性的」、「たくましい—ひ弱」、「華やか—素朴」、「好ましくない—好ましい」、「活発—穏やか」、「大人びた—幼い」、「かっこいい—かわいい」、「古い—新しい」、「頼りになる—頼りにならない」、「子ども好き—子ども嫌い」の10項目であった（調査票での提示順）。これに対する評価は、1=「左に近い」~5=「右に近い」の5件法で尋ねた。また、4つの美男子平均顔の切り替え部分では、印象評価の混乱が生じないように、③結婚観や子ども観、配偶戦略などに関する質問を挿入している。

②については、4つの美男子平均顔に対して、恋愛相手や結婚相手として魅力度の順位をつけてもらう質問を女子学生に行った。男子学生に対しては、女性が恋愛相手や結婚相手として選びそうな平均顔について予想順位をつけてもらった。なお、それぞれの質問の際には、順位付けの比較がしやすいように、上段に B 顔と D 顔、下段に A 顔と C 顔を並べた4枚一組の平均顔を1回ごと提示している。

③の配偶戦略としては、結婚相手選びで重視すること10項目（容姿が魅力的、経済力が高い、運動神経がよい等：5件法）と、子育て方針10項目（わが子は自然で遊ばせたい、親の言うことを素直によく聞く子どもに育ててほしい：4件法）のほか、ブレイン・フォグ頻度（日中、何を考えていたのか分からなくなることがある：5件法）を尋ねている。このブレイン・フォグの頻度は、エストロゲン分泌量の代替指標（Fisher 2009）であり、エストロゲン分泌量の変動によって、男らしい男性顔に対する女性の選り好みは周期的に上下することが知られている（Penton-Voak & Perrett 2000, 坂口 2009）。

この調査票の作成にあたっては、WEB アンケート作成ツール Questant（クエスタント）を利用し、スマホや PC から参加できる WEB 調査の形式をとった。調査票の完成後は、URL 情報を記載した QC コードを大学内で配布して調査への協力を求めた。

アンケート調査は、2021年11月18日から26日までの9日間行われ、259名のアクセス者数のうち、回答を完了した者は163名であった。回答デバイスもアクセスデバイスも、スマートフォンが8割以上を占め、残りは PC からであった。これら163名の調査協力者の性別は、「女性」91名、「男性」71名、「その他」1名であった。ここでは、「その他」の1名を除いた162名について分析を行っていく。

### 3. 分析結果

#### 3-1. ①バイポーラ尺度による美男子平均顔の印象評価

最初に、前節で作成した4つの美男子平均顔（図2）について、10項目のバイポーラ尺度で印象評価を行った結果について検討してみよう。図2に示したのは、各時期の平均顔に対するバイポーラ尺度の男女別平均点と標準誤差（エラーバー）である。平均点が高いほど、印象評価が右側の形容詞のイメージに近いということを意味している。図3では、全体としての動向を把握しやすいように、女子学生の D 顔の平均が高い順に、バイポーラ尺度の表示順を入れ替えている。

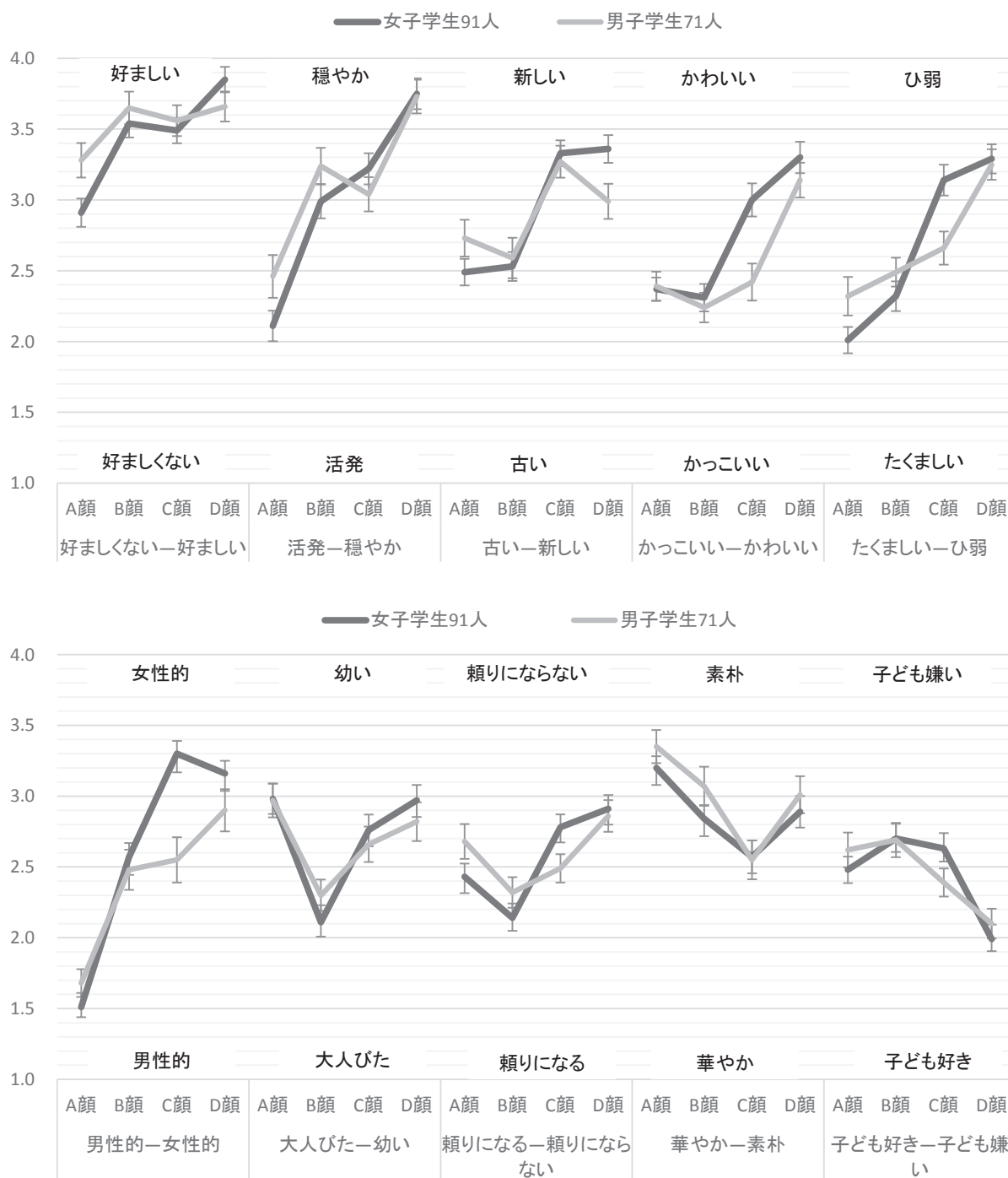
この図3によると、上段の5項目と下段の「男性的—女性的」については、A 顔に比べ D 顔の印象評価が男女ともかなり高く、右肩上がりの傾向が明白である。すなわち、A 顔に比べて D 顔は、「穏やか」、「女性的」、「ひ弱」、「かわいい」、「好ましい」、「新しい」、「子ども好き」という印象を男女と

も受けていることがわかる。顔の印象評価については、個人差や性差、文化差が大きいと考えられがちであるが、決してそうではなく、かなり共通していることがわかる。

他方、図3の下段中央の3項目「大人びたー幼い」、「頼りになるー頼りにならない」、「華やかー素朴」に関しては、印象評価の平均値がV字型を示しており、A顔とD顔の印象の差が比較的小さい。そして最後の、「子ども好きー子ども嫌い」に関しては、A顔やB顔よりもD顔の方が「子ども好き」の印象を与えていることがわかる。

このような印象評価の傾向を確認するために、美男子平均顔の種類（A顔～D顔の4水準）と調査対象者の性別による2元配置の反復測定分散分析を行った。表2では、分散分析と多重比較の結果

図3. 各時期の平均顔に対する印象評価の平均と標準誤差



(D 顔と A 顔の差のみ) を示している。表 2 によれば、4 種類の平均顔の主効果は、すべて 0.1% 水準で有意であった。ただし、A 顔と D 顔の印象評価に統計的に有意な差が見られた項目は、「穏やか」、「女性的」、「ひ弱」、「かわいい」、「好ましい」、「新しい」、「子ども好き」であった。そのうち、「活発—穏やか」と「男性的—女性的」、「たくましい—ひ弱」の 3 尺度では、とくに大きな変化が見られた。

他方、性別の主効果が見られたのは、「かっこいい—かわいい」と「男性的—女性的」の 2 項目だけであり、女子学生のほうが「かわいい」、「女性的」という印象評価を行うことが多かった。また性別と平均顔の交互作用に関しては、「男性的—女性的」、「たくましい—ひ弱」、「古い—新しい」、「かっこいい—かわいい」、「好ましくない—好ましい」、「活発—穏やか」の 6 項目で統計的な有意差が見られた。いずれの項目においても、女子学生のほうが男子学生よりも印象評価のばらつきが大きく、美男子平均顔の違いに敏感である傾向が見られた。

以上の分析結果から、最新の美男子平均顔 (D 顔) ほど「穏やか」で「女性的」、「ひ弱」、「かわいい」と評価される傾向は明らかであり、「脱男性化」が急速に進展していることを確認することができた。時間的変化に伴うこのような方向性は、若い男性に対する主観的印象や偏見では決してなく、「穏やか」という評価を軸に広く共有された認知であることが明らかになった。このことからすれば、若い男性の「脱男性化」は、一定の客観的事実であり、規範的ニュアンス抜きでそのメカニズムを検討する必要のあるテーマであるといえるだろう。

表 2. 平均顔の印象評価に関する 2 元配置の反復測定分散分析と Bonferroni の多重比較

バイポーラ尺度		F 値	偏イータ <sup>2</sup> 乗	平均顔 D-A の差
好ましくない—好ましい	平均顔主効果	19.89 ***	.111	.657 ***
	交互作用	2.19 *	.020	
	性別主効果	0.85 ns	.005	
活発—穏やか	平均顔主効果	45.91 ***	.223	1.452 ***
	交互作用	1.91 *	.012	
	性別主効果	1.78 ns	.011	
古い—新しい	平均顔主効果	28.69 ***	.152	.561 ***
	交互作用	3.35 *	.021	
	性別主効果	0.12 ns	.001	
かっこいい—かわいい	平均顔主効果	32.63 ***	.169	.835 ***
	交互作用	3.18 *	.019	
	性別主効果	5.09 *	.031	
たくましい—ひ弱	平均顔主効果	42.54 ***	.210	1.102 ***
	交互作用	5.22 **	.032	
	性別主効果	0.01 ns	.000	
男性的—女性的	平均顔主効果	65.31 ***	.290	1.442 ***
	交互作用	5.68 ***	.034	
	性別主効果	4.34 *	.026	
大人びた—幼い	平均顔主効果	18.64 ***	.104	-.083 ns
	交互作用	0.86 ns	.005	
	性別主効果	0.34 ns	.000	
頼りになる—頼りにならない	平均顔主効果	11.94 ***	.069	.333 ns
	交互作用	2.44 ns	.015	
	性別主効果	0.08 ns	.001	
華やか—素朴	平均顔主効果	13.08 ***	.760	-.323 ns
	交互作用	0.44 ns	.003	
	性別主効果	1.30 ns	.008	
子ども好き—子ども嫌い	平均顔主効果	18.31 ***	.103	-.508 ***
	交互作用	1.61 ns	.010	
	性別主効果	0.00 ns	.000	

\*\*\* p<.001, \*\* p<.01, \* p<.05



### 3-2. ②恋愛相手や結婚相手としての魅力度順位とその予想

次に、4つの美男子平均顔が、恋愛相手や結婚相手としてどの程度魅力的なのかという点を検討することにしたい。図4では、恋愛相手や結婚相手として、女子学生が第1位に選んだ美男子平均顔の割合を示している。この図によると、女子学生においては、恋愛相手としても結婚相手としても、約半数が時期的に最も新しいD顔を第1位に選んでいる。女子学生が第2位に選んだのは、恋愛相手としてはB顔であったが、結婚相手としてはA顔とB顔が同じ割合であった。B顔は恋愛相手としては望ましいが、結婚相手としては望ましくないと考えられていることになる。

これに対して、男子学生の予想は大きく外れていた。とくに恋愛相手については、約4割の男子学生がC顔を第1位と予想しており、D顔やB顔を第1位に挙げる割合は、女子学生に比べて少なかった。結婚相手については、B顔を挙げる割合が比較的高く、逆にD顔を挙げる割合が少なかった。

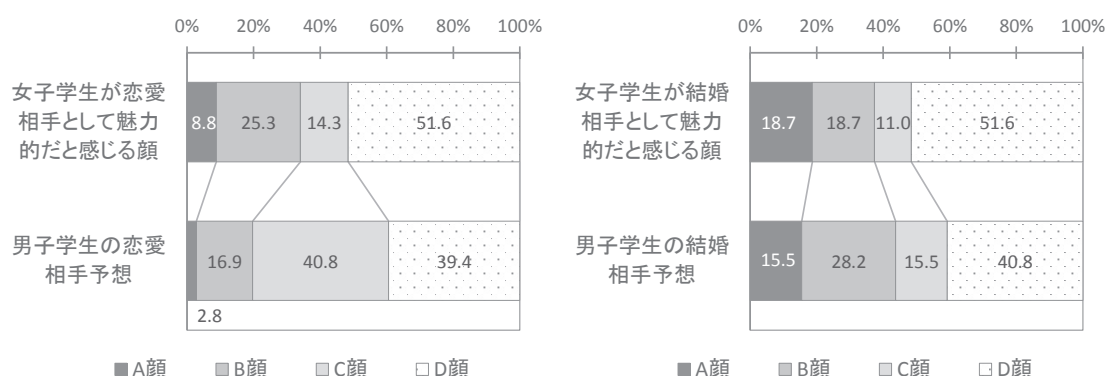


図4. 恋愛相手（左）や結婚相手（右）として最も魅力的な平均顔

さらに、図5では、4つの美男子平均顔ごとに、どのような順位がつけられたのかその割合を示したものである。この図5によると、恋愛相手としてD顔を1位か2位に挙げている者の割合は、女子学生の8割、男子学生の7割に及んでいる。結婚相手ではその割合が若干下がるが、女子学生の74%、男子学生の66%が上位に挙げている。

次に、魅力度の順位が高かったのは、女子学生ではB顔であった。恋愛相手としても結婚相手としても半数程度が1~2位の順序をつけている。C顔については、恋愛相手としての魅力度の順位が、男女で大きく異なっていた。他方、A顔の不人気は明らかで、恋愛相手としても結婚相手としても、大半の人が最下位の評価をしていた。

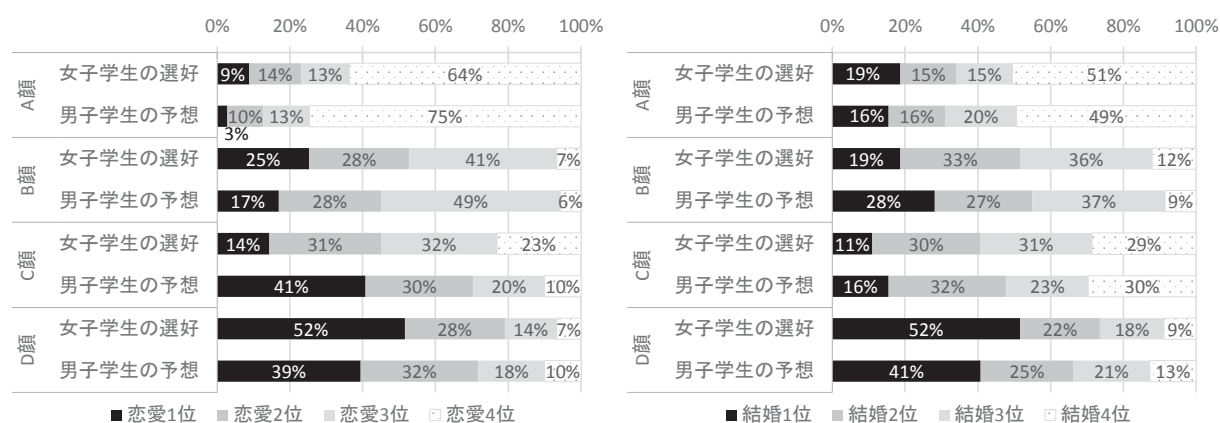


図5. 平均顔の種類ごとに見た恋愛相手（左）・結婚相手（右）としての魅力度の順位

### 3-3. ③平均顔の魅力に影響を与える要因の検討

各時期の美男子平均顔はどれもみな端正な顔立ちであることには間違いはないが、いったいどこで、このような魅力度の差がついているのだろうか。ここでは、女子学生からの人気が比較的高い最新のD顔と2000年前後のB顔を対象に、その要因を検討していく。

最初に、先に見た美男子平均顔の印象評価とD顔・B顔の魅力度順位の関連について、スピアマンの順位相関係数を求めて検討を行った。その際、魅力度の順位については、1~4位にそれぞれ4~1点を割り当てて計算している。

表3. 恋愛・結婚相手としての平均顔魅力度順位と印象評価（スピアマンのロー係数）

	D顔				B顔			
	恋愛相手としての魅力		結婚相手としての魅力		恋愛相手としての魅力		結婚相手としての魅力	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
好ましくない—好ましい	.235 *	.125	.212 *	.298 *	.067	.093	-.122	-.122
活発—穏やか	.231 *	-.101	.098	.158	.092	-.078	.105	.058
古い—新しい	.009	.325 **	.035	.038	-.094	-.072	-.081	-.088
たくましい—ひ弱	-.060	.041	-.035	-.205	-.001	-.259 *	-.045	-.133
男性的—女性的	-.061	-.091	-.165	-.165	-.034	-.205	.126	.130
華やか—素朴	-.068	-.284 *	-.028	.007	.062	-.158	.119	-.077
大人びた—幼い	-.120	-.133	.071	-.038	-.008	-.272 *	-.033	-.095
かっこいい—かわいい	-.149	-.080	-.036	-.002	.029	-.071	.172	.064
子ども好き—子ども嫌い	-.152	-.093	-.143	-.181	-.205	.143	-.234 *	-.076
頼りになる—頼りにならない	-.241 *	-.086	-.109	-.246 *	.051	-.066	.054	-.113
N	91	71	91	71	91	71	91	71

\*\* p<.01, \* p<.05

表3によると、恋愛相手としてのD顔に関しては、女子学生の場合、「頼りになる」、「好ましい」、「穏やか」といった印象評価が魅力度順位と関連している。それに対して、男子学生の場合、「新しい」や「華やか」といった印象評価から魅力度順位を予想している。結婚相手としてのD顔に関しては、女子学生では「好ましい」、男子学生では「好ましい」と「頼りになる」が関連していた。

他方、恋愛相手としてのB顔に関しては、女子学生では統計的に有意な関連が見られなかった。男子学生では、「たくましい」や「大人びた」の印象評価と予想順位が関連していた。結婚相手としてのD顔に関しては、「子ども好き」の印象評価と魅力度順位が関連していた。男子学生では統計的に有意な関連が見られなかった。

このようにしてみると、美男子平均顔の印象評価と魅力度順位の関連係数は、全体としてそれほど大きくない。しかし、その理由は、2つの変数とも回答が特定の値に集中し、ばらつきが小さかったためであると考えられる。

そこで次に、調査対象者側の要因に着目して、結婚観や子ども観、ブレイン・フォグ頻度などを独立変数にしてロジスティック回帰分析による検討を行った。表4の分析では、女子学生を対象者として、D顔やB顔を魅力度1位に挙げている（1）か否（0）かを従属変数として分析を行っている。

表4によれば、結婚相手選びで経済力を重視しない人や容姿を重視する人、ブレイン・フォグ頻度が低い人ほど、恋愛相手としてD顔を選ぶ確率が高い。また子育て方針として子供に従順さを求めたり、ブレイン・フォグの頻度が低い人（低エストロゲン）ほど、結婚相手としてD顔を選ぶ確率が高い。これらのことから考えると、「穏やか」なD顔の魅力というのは、あまり競争的ではない、比較的豊かな環境での配偶戦略の結果として考えることができるだろう。

これとは対称的に、結婚相手の経済力を重視し、魅力的な容姿を重視していない場合や、ブレイン

表 4. 女子学生の選り好みに関するロジスティック回帰分析の結果 (偏回帰係数)

		D顔1位		B顔1位	
		恋愛相手 n=47	結婚相手 n=47	恋愛相手 n=23	結婚相手 n=17
結婚相手選びで重視する要素	経済力が高いこと (1-5)	-.722 *	-.210	.939 *	.321
	容姿が魅力的なこと (1-5)	.595 *	.276	-.539	-.121
	運動神経が良いこと (1-5)	.018	-.247	-.185	-.013
子育て方針	親の言うことを素直によく聞く子どもに育ってほしい (1-4)	.263	.931 **	-.150	-.345
ブレインフォグ	日中、何を考えていたのかわからなくなることもある (1-5)	-.369 *	-.392 *	.485 *	.498
	-2 対数尤度	112.381	111.378	90.571	81.830
	Cox-Snell R <sup>2</sup>	.140	.149	.127	.062
	Nagelkerke R <sup>2</sup>	.186	.199	.187	.100
	N	91	91	91	91

\*\* p<.01, \* p<.05

ン・フォグの頻度が高い (高エストロゲン) 場合には、恋愛相手の1位に B 顔を選ぶ確率が高くなっている。この分析結果で特徴的な点は、結婚相手の経済力や魅力的な容姿を重視するか、子どもに従順性を期待するのか、ブレイン・フォグ頻度の高低に関して、D 顔1位の場合と B 顔1位の場合とで編回帰係数の符号が逆転している点である。これらのことから、D 顔好みと B 顔好みとは、経済力や魅力的な容姿、子どもの従順性の期待、ブレイン・フォグの頻度などの点において、対称的な指向性を持つものとして位置づけられる。

このような調査対象者の要因を考慮することで、「穏やか」で「女性的」、「ひ弱」、「かわいい」と評価される D 顔の魅力と、それとほぼ正反対に「活発な」で「男性的」、「たくましい」、「カッコいい」とされる B 顔の魅力を、配偶戦略の違いという観点から一貫して理解できることになる。

#### 4. 結論と課題—自己家畜化論からみた美男子平均顔の時代変化

以上、本研究においては、ジュノン・スーパーボーイ BEST30から、4つの時期の美男子平均顔を作成し、それらを用いたアンケート調査によって、次の3点を明らかにしてきた。

- ①最新の美男子平均顔 (D 顔) ほど「穏やか」で「女性的」、「ひ弱」、「かわいい」と評価される傾向があり、美男子平均顔においても「脱男性化」の時系列変化を客観的事実として確認できた。
- ②最も「穏やか」な最新の美男子平均顔に対して、半数以上の女子学生が恋人・結婚相手としての魅力を感じており、従順性に対する女性の選り好みは明確にみられた。また、男子学生はそうした選り好みを十分予測できなかった。
- ③最も「穏やか」な最新の美男子平均顔に対する女子学生の選り好みは、結婚相手の経済力よりも容姿を重視する姿勢や、子どもへの従順性の期待、ブレイン・フォグ頻度の低さなどと関連していた。

これらの知見は、若者に関する先行研究や「脱男性化」をめぐる従来の議論にとって、どのようなインプリケーションを持つのだろうか。最後にこの点に関する考察を行い、課題を明示することにした。

若者に関するこれまでの先行研究においては、文化的・社会的変化に伴って、若者のパーソナリティや人間関係、行動パターンが変化するという文化的・社会的アプローチが採用されてきた。しかし、そうした文化的・社会的アプローチでは、若い男性にみられる形態学的変化まで説明すること

は難しい。他方、形態学的変化に着目した原島・馬場（1996）は、男性顔の顎の小型化を食生活の変化から説明する適応論的アプローチを展開してきた。しかしながら、この適応論的アプローチにおいては、形態学的変化の多面性を説明できないだけでなく、生理学的変化や心理学的変化との関連性もうまく説明できないと考えられる。

これに対して、本研究では、Wrangham（2019）や Hare（2020）らの自己家畜化論にもとづいて「脱男性化」傾向を説明することを試みた。すなわち、従順な個体同士の交配によって、攻撃性の高い個体が遺伝子プールから排除され、「脱男性化」という一連の形態学的・生理学的・心理学的変化（＝家畜化症候群）が生じているという因果図式にもとづいて議論を進めてきた。具体的には、③一定の時代状況において女性の配偶戦略が非競争的・審美的なものに変化することで、②従順性に対する女性の選り好み強化され、配偶選択に影響を与えることで、①若い男性の間に、「脱男性化」という一連の形態学的・生理学的・心理学的変化が生じているという方向で因果関係を考えたのである。

もちろん、本研究は、この因果図式を構成する個々の命題を操作化し、アンケート調査にもとづいて検討したものであり、因果図式全体を証明したわけでは決してない。また個々の命題においても、検討しなければならない課題が山積している。そのうち、とくに重要な課題は、次の3点であろう。

第1に、4つの美男子平均顔を用いて示した時代変化の特徴が、一般の男性にもそのまま当てはまるのか、検討する必要があるだろう。というのも、脱男性化の傾向は、ここで取り上げたような「美男子」や「イケメン」に限定的な特徴かもしれないし、「美男子」や「イケメン」のカテゴリー自体が時代的にシフトした可能性も考えられるからである。ただし、一般の高校生の卒業アルバムを用いた原島・馬場（1996）でも脱男性化傾向が見られたことから考えれば、一般男性においても、美男子平均顔と同様に脱男性化が進行していることに疑いはない。むしろ、美男子コンテストの候補者 BEST30 という複数回の投票行動（選り好み）を経た美男子平均顔を用いることで、一般男性の時代変化をどの程度増幅されたり誇張されたりしているのかという点が問題になると考えられる。

第2に、実際の婚姻関係において、従順性や反動的攻撃性がどの程度影響しているのかを検討する必要があるだろう。本研究では、「穏やか」な美男子平均顔の魅力が高いことから、従順性に対する女性の選り好みが存在することを強調してきた。しかし、このことは、実際の配偶選択において、反動的攻撃性の高い男性が避けられ、従順性の高い男性が選ばれているということを必ずしも意味しない。少なくともこれまでの結婚研究において注目されてきたのは、低収入や低学歴などの社会経済的要因であった（Ghaznavi et al 2022）。したがって、反動的攻撃性の高さが低収入や低学歴とどの程度関連しているのかを調べる必要があるだろう。

第3に、多様な対象者を調査に加えることで、社会的環境の変化と女性の配偶戦略の関連を明らかにする必要があるだろう。進化心理学のバイブルともいわれる1992年の『適応する心』において、Ellis（1992）は、女性の配偶戦略の基礎を成す3要素として、①身体的暴力から自分と子どもを防衛すること、②自分と子どもを扶養できる経済力があること、③子育ての協力者としての必要性の3点を挙げていた。本研究の調査によれば、①身体的暴力や②経済力がそれほど重要でなくなれば、女性は、競争的価値ではなく審美的価値を男性に求める傾向が示唆されている。しかし、③子育て協力を求めているかといえば、必ずしもそうとは言えなかった。むしろ、穏やかさやかわいさといったペットの価値を求めている可能性も考えられる。このような配偶戦略の変化のメカニズムを明らかにするためには、今後、大規模なコーホート調査や国際比較調査を企画する必要があるだろう。

いずれにしても、これらの研究課題に向き合うことは、人間の遺伝や進化をタブー視してきた従来の社会科学の慣行を打ち破り、遺伝学や進化学の知見を手掛かりに新たに社会科学を立て直してい

く試みにほかならない。私たち人間は、遺伝や進化から自由な存在では決してないし、逆に無自覚な社会的選択や意思決定が、人間の遺伝や進化に深刻な影響を与えてきた可能性も考えられる。そうした意味において、「脱男性化」という研究テーマは、私たち人間が今なお進化のプロセスのただ中に存在していて、その基礎の上に社会を再構成しつづけるしかないということを強烈に自覚させるテーマである。進化生物学者マーリーン・ズックは、このことを次のような形で指摘している（Zuk 2013=2015:290）。

どんな生物も完璧に適応した状態に達し、ひと息ついて止まるということはない。私たちのすべての性質、そしてすべての遺伝子は、速さは違っても常に進化にさらされていて、完成型というのはいないのだ。

## 注

- 1) ヒトの自己家畜化をもたらした淘汰圧として、Wrangham (2019) は、攻撃性の高い個人が共謀によって処刑されてきたという処刑仮説を展開している。これに対して本研究では、配偶者選択や避妊・中絶、間引き、養育放棄といった性淘汰の影響の方が、自己家畜化により大きな影響を与えたのではないかと考えている。また配偶者選択においては、男性もまた女性に従順性を求めていることは明らかであるが、その狙いは托卵を防ぐ手段としてであり、配偶関係の決定にどれだけ影響力を持っているのかわからないため、ここでは取り上げていない。
- 2) 雑誌『ジュノン』に登場するコンテスト候補者たちの平均顔の作成や調査での利用に関しては、山口大学研究推進機構知的財産センターに照会し、合成された平均顔が「誰でもない」ものになっている以上、著作権に関しても肖像権に関しても問題がないことを確認している。

## 引用文献

- Ellis BJ. (1992) The Evolution of Sexual Attraction. In Barkow JH, Cosmides L, & Tooby J eds. *The Adapted Mind: Evolutionary Psychology and the Generation of Culture*. Oxford University Press, pp.267-268.
- Fisher H. (2009) *WHY HIM? WHY HER?* Henry Holt & Co. (= 吉田利子訳『「運命の人」は脳内ホルモンで決まる！—4つのパーソナリティ・タイプが教える愛の法則』講談社)
- Ghaznavi C, Sakamoto H, Yamasaki L, Nomura S, Yoneoka D, et al. (2022) Salaries, Degrees, and Babies: Trends in Fertility by Income and Education among Japanese Men and Women Born 1943-1975— Analysis of National Surveys. *PLOS ONE* 17(4): e0266835. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0266835>
- 原島博・馬場悠男 (1996) 『人の顔を変えたのは何か』河出書房新書.
- Hare B and Woods V. (2020) *Survival of the Friendliest: Understanding Our Origins and Rediscovering Our Common Humanity*. Random House. (= 藤原多伽夫訳2022『ヒトは<家畜化>して進化した』白揚社)
- 伊藤公雄・多賀太・大東貢生・大山治彦 (2022) 『男性危機?』晃洋書房.
- JUNON TV (2021) 「応募スタート第35回 ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト」  
<https://www.junon-tv.jp/articles/194?backpath=%2Farticles%3Ftag%3D1> (2022年4月15日閲覧).
- Levine H, Jørgensen N, Martino-Andrade A, Mendiola J, Weksler-Derri D, Mindlis I, Pinotti R, Swan SH. (2017) Temporal Trends in Sperm Count: A Systematic Review and Meta-Regression Analysis. *Human Reproduction Update* 23-6: 646-659.  
<https://doi.org/10.1093/humupd/dmx022>

- Lokeshwar SD, Patel P, Fantus RJ, Halpern J, Chang C, Kargi AY, Ramasamy R. (2021) Decline in Serum Testosterone Levels Among Adolescent and Young Adult Men in the USA. *Eur Urol Focus* 7(4):886-889. <https://doi.org/10.1016/j.euf.2020.02.006>.
- 松本悠佑 (2019) 「自己家畜化論から見た男子劣化社会」山口大学人文科学研究科修士論文.
- Penton-Voak IS, Perrett DI. (2000) Female Preference for Male Faces Changes Cyclically: Further evidence. *Evolution and Human Behavior* 21: 39-48.
- Pinker, S. (2011) *The Better Angels of our Nature*. Viking. (= 幾島幸子・塩原通緒訳2015 『暴力の人類史』上下、青土社)
- 坂口菊恵 (2009) 『ナンパを科学する』東京書籍.
- 瀬山淳一郎 (2022) Less than 5 percent 公式ブログ  
(<http://psychlab.jugem.jp/?pid=1#averagefaceJ> 2022年4月15日最終アクセス)
- 染川みさと (2022) 「平均顔の時代変化に関する考察—アンケート調査を用いて—」山口大学人文学部卒業論文.
- 高橋征仁 (2013) 「欲望の時代からリスクの時代へ—性の自己決定をめぐるパラドクス」、日本性教育協会編 『「若者の性」白書—第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館, 43-61頁.
- Wrangham, R. (2019) *The Goodness Paradox: The Strange Relationship Between Virtue and Violence in Human Evolution*. Vintage. (= 依田卓巳訳2020 『善と悪のパラドックス』NTT 出版)
- Zimbardo P and Coulombe ND. (2015) *Man Disconnected: How Technology Has Sabotaged What It Means to Be Male*. Rider. (= 高月園子訳2017 『男子劣化社会—ネットに繋がりがつばなしで繋がれない』晶文社)
- Zuk M. (2013) *PALEOFANTASY: What Evolution Really Tells Us about Sex, Diet, and How We Live*. W. W. Norton & Company. (= 渡会圭子訳2015 『私たちは今でも進化しているのか?』文藝春秋)